

まがたまさんさい
勾玉三彩

加羅古呂庵 一泉

まがたまさんさい 勾玉三彩

縄文時代から弥生時代を経て古墳時代へと長い時を経て作られ続けたという勾玉。装身具でもあったのですが、『古事記』や『日本書紀』では、アマテラスが弟のササノオと対決する際に勾玉や管玉を連ねたネックレスを身につけたとあるように、古代においてはパワーを発揮するオブジェクトとして使われたようです。勾玉はいろいろな材料で作られましたが、この曲では、短いイントロのあと、「翡翠」「水晶」「琥珀」の3つのシーンで構成しました。

翡翠は糸魚川市付近の新潟・富山県境で産出し、その成分によって色は異なるようですが、ここでは淡い緑の勾玉をイメージしました。身につけることで力が湧いてくるというのは、フォッサマグナのパワーによって生成されたからでしょうか？

水晶は透明で、神秘的な静謐さを感じさせてくれます。情報が溢れかえる現代において、心を落ち着かせてくれるような気がします。

琥珀の温かみのある色は、どこか懐かしい時代を想起させます。SNS などなかった頃は、文字を読んで傷ついたり、不安になったりすることもなく、人と人のつながりが弱さを支えてくれていました。

6世紀に百濟から五経博士が貢され、仏教も伝来しました。古代の人々も新しい思想を採り入れ、考え方が変わっていくなかで、古墳ともに勾玉も消えていきました。そして1,500年の時を経た今、ネットショップで金額表示がついた勾玉をたくさん見ることができます。

参考文献：『日本ヒスイの本』（北出幸男 青弓社）、Wikipedia

加羅古呂庵ホームページ



1尺8寸管

尺八I

1尺8寸管

尺八II

1尺8寸管

尺八III

2尺3寸管

尺八IV